

なぜ博士課程進学はキャリア選択から除外されるのか —キャリア観・社会とアカデミアの関係性への認識に着目して—

端 希 子

なぜ博士課程進学はキャリア選択から除外されるのか —キャリア観・社会とアカデミアの関係性への認識に着目して—

端 希 子

Why is Pursuing a Doctoral Program Ruled Out as a Career Choice in Japan?

Kiko HANA

Abstract

This study explores the mechanisms of career decisions among master's degree students who do not wish to advance to doctoral programs, focusing on their perceptions of the relationship between universities and society and the factors that generate these perceptions. The decreasing number of doctoral students has been attributed to financial difficulties during students' studies and the difficulty of finding employment after obtaining a doctorate, as well as poor employment conditions after. In addition to these problems, interviews with students reveal that the mechanisms that exclude doctoral study as a career choice also consist of social stresses and anxieties arising from a perception that being a researcher is a career that only has indirect impacts on society, and from a belief that research must be practical to be of social significance. This study also suggests that such social stress and anxiety may contribute to postgraduates' underestimation of their research skills and aptitudes, which is one of the reasons for not going on to doctoral studies and is often perceived as a personal issue, as well as the potential for institutional and policy approaches to address them.

1. はじめに

日本の科学技術政策において研究力向上は大きなテーマの一つである。科学技術・学術政策研究所（2021）によれば、日本の論文数シェア、Top10%補正論文シェア、Top 1%補正論文数シェアは2018年時点でそれぞれ世界4位、10位、9位を記録し、過去最低の順位となった。これは日本の国際的な研究競争力が質・量ともに相対的に低下していることを示す。

国は、こうした研究力の相対的な低下の要因の一つとして、劣悪な研究環境やキャリアパスの不透明性を背景とする若手研究者の減少があると考えている（文部科学省 2018a）。事実、修士課程

* 東京大学大学院教育学研究科 修士課程

修了者の博士課程進学率は特に社会科学・人文科学・理学系を中心に減少傾向にあり、2020年度は9.4%となった（科学技術・学術政策研究所 2021）。

博士課程進学率を向上させ、次代を担う若手研究者として育成するための施策は近年数多く行われるようになった。令和2年度の『文部科学白書』（2021）では特集として「研究力向上のための若手研究者への支援」の項が設けられ、経済的支援や就職支援の充実に加えて、アカデミア・産業界と連携したさらなる取り組みの推進が強調されている。

では、これらの施策は博士課程進学者の増加に向けた適切なアプローチとして機能しているのだろうか。博士課程への進学を判断する、まさに施策のメインターゲットである修士課程の学生や修士課程進学を断念した大卒者らがどのような困難を抱え、どのようなメカニズムで博士課程進学ひいては研究者としてのキャリアを目指さない状態に至るのかということは必ずしも十分に検討されてきたとは言えない。そこで本稿では、修士課程在籍者で博士課程への進学を希望しない学生や修士課程進学を断念した大卒者に焦点を当て、進学の検討時に生じる考えとメカニズムを社会との関係性という観点から考察することで、将来の若手研究者支援・育成策、また施策効果の評価として考慮すべき新たな視点について提示することを目指す。

2. 先行研究の検討と本研究の課題

博士課程進学者が減少傾向にある要因については、角田・加藤（2009）、治部（2021）など、これまで複数の先行研究・調査等によって議論されており、大学院在籍中の経済的困窮、博士号取得後の民間企業・アカデミアにおけるキャリアパスの不透明さ、雇用後の博士号取得者に対する待遇の3点が特に共通して問題視されている。また近年、研究以外の業務に研究者のエフォートが多く割かれていることが博士課程進学の意欲を低下させているのではないかという指摘もなされている（日本経済新聞 2018）。国の若手研究者支援・育成策の検討と立案はこうした論点に基づいて進められてきた（文部科学省 2018b、岡本 2015）。

ただし、特に修士課程への進学状況は文系・理系によって大きく異なる傾向にある。修士課程への進学率全体は近年横ばい傾向にあるが、理系においては、工学系を中心に修士号取得者の企業等への就職は比較的安定しているとみなされており、2021年度の修士課程への進学者数は農学で0.3万人、理学で0.6万人、工学では3.1万人に上る（科学技術・学術政策研究所 2021）。一方で、文系の修士課程進学者数は人文科学で0.4万人、社会科学では0.6万人にすぎず、学士課程への入学者数に比べ極めて少ない（同上）。背景として、文系総合職において企業の採用担当者が文系院卒者の能力を適切に評価できておらず（濱中 2021）、大学院修了が理系大学院修了者や文系・理学部卒業者に比べ就職の面で不利に働く傾向にあることが指摘されている（寺尾・梅崎・田澤 2015、吉田 2021）。

このように、理系、文系いずれにしても大学院で学ぶこと、とりわけ博士課程に進学することには経済的・将来的に大きな不安が付きまとうこと、それが進学の阻害要因となっていることが先行研究によって明らかになっているが、大学院生が博士課程進学を目指さないと判断する過程で何を考えているのか、そこに在学中に感じる不安やストレスがいかに関わっているのか、また「博士課

程に進学し研究者になる」というキャリアパスがどう認識され、位置付けられているのかを扱った質的研究は、人文系大学院の修士課程に在籍する学生を対象としたインタビュー調査を行なった岡崎（2018）があるが、現状極めて限られている。そこで本研究では、キャリア選択の岐路に立ち博士課程進学を選ばなかった修士課程の大学院生らに焦点を当て、彼ら・彼女らの認識と意思決定のメカニズムをインタビュー調査で明らかにすることとした。

また本研究では、メカニズムの解明において「アカデミア・院生と社会との関わり」が重要な要素となっているという仮説を立てた。なぜなら、治部・星野（2021）による修士課程の学生を対象とした追跡調査において、学生らが就職を選んだ理由として「社会に出て仕事がしたい」が全体で二位、62.7%に上っているからである。調査では回答理由の更なる探索は行われていないが、これまでの先行研究が大学院進学に係る問題を個人の金銭的なコストとベネフィットの観点を中心に検討している一方で、この回答結果は実際の学生らのキャリア選択のメカニズムはそうした事柄を含みつつもさらに社会的な視点を踏まえている可能性を示唆している。そこで、本研究において大学院生らが意識しているアカデミア・学生と社会との関係性とその認識の形成過程を探り、これまで先行研究で示されてきた博士課程進学者・若手研究者の減少に関する論点との関連を分析することで、従来の問題認識に新たな視点を加えることを試みる。

3. 研究方法と対象者

設定した研究課題を明らかにするために、2021年8月10日から17日にかけて6名の修士課程在籍者と1名の修士課程進学断念者に対して半構造化インタビューを行った。インタビューはWeb会議ツールであるZoomを利用して行い、事前にインタビューの目的や用途について説明し同意を得た上で1時間から1時間半程度インタビューを実施した。

表1 インタビュー対象者一覧

対象者	性別	文理区分	現在の就職・進学状況	学年
A	女	文	教育学研究科	M1
B	女	文	人文社会系研究科	M1
C	女	文	就職	なし
D	男	文	社会科学・公共政策系（海外大学院）	M1
E	女	理	理学系研究科	M1
F	女	理	工学系研究科	M1
G	男	理	工学系研究科	M1

出所：筆者作成

表1に対象者の一覧を示した。対象者は全員東京大学の学士課程を2020年度に卒業した後に就職・進学しており、就職・進学時点で単身生活を営んでいる。またインタビュー時点でいずれの対象者も博士課程進学を希望しないと回答した。修士課程に進学した対象者については1名を除き東

京大学大学院へ進学している者を選定したが、これは現在の研究や生活に関する支援について尋ねる際に大学間での差異を生じさせないことで研究分野による違いにより着目して検討することを試みたためである。そのため、大学間での支援の格差については本項では十分に検討しきれていない側面がある。海外大学院に進学した1名と非進学者1名に関しては国内の大学院教育を受けていないために、修士課程における研究活動や学習、生活の点において回答が得られなかった箇所があるほか、回答が得られた場合でも国内の大学院生が抱える問題とは異なっている可能性がある。しかし、海外大学院への進学者についてはより多様なキャリア観を探る上で重要な層であり、非修士課程進学者については当該インタビューが大学院進学と就職とを意識的に検討した経験をもち、また文系では修士課程への進学の際の問題が博士課程の進学で生じる問題とかなりの程度重なっていると考えられることから、本稿で目的とするキャリア選択のメカニズムがより明確化されることが期待できると考え、両者をインタビューとして加えた。ただし、海外大学院進学者と非修士課程進学者をそれぞれ1名しか取り上げることができなかったため、両者とも代表性を十分に担保していない可能性がある。またインタビュー全体の人数も十分とはいえない。

またインタビューの多くは修士課程1年に在籍しているが、既にインターンシップや会社説明会など何らかの就職活動を行っており、インタビューで明らかにしたいアカデミアと社会との関係性や職業についての価値観を回答することが可能だった。ただし、インタビューを実施した時期は、修士課程の2年間のうち比較的早期のタイミングであったため、インタビューらの就職活動・研究経験は限られるところがあり、修士課程の院生らが持つアカデミアに対する認識の一部しか得られていない可能性がある。また今回の調査では院生らには20代の学生として共通のキャリア観が存在していると考え、文理双方へのインタビューを行ったが、実際の就職活動における両者の違いは十分に捉えられていない。また特に博士課程への進学を強く希望していたものの最終的には断念せざるを得なかった層の認識を十分に拾い上げることができていない可能性が高い。より長期的、あるいは修士課程後期における検討の過程や葛藤を反映できないという限界もある。

目的とするキャリア観、アカデミアへの認識や在学中の不安・ストレス、それらを踏まえた博士課程に進学しないメカニズムを探索することは可能と考えるが、前述の通り複数の限界が存在しており、本稿で提示するキャリア選択のメカニズムや社会との関係性は仮説的なものにとどまらざるを得ない。より精緻化するためには、今後さらに大規模な質的・量的調査を行う必要がある。また、実際に博士課程に進学した学生との比較を行うことによって、進学と非進学の間には存在するメカニズム・認識の違いや取るべきアプローチの差異が明確化されるものと考えられるが、本研究ではこうした比較検討を行っていないため、この点も本稿の限界、また今後の課題として指摘できる。

4. どのようにして修士課程への進学を決断したのか

修士課程へ進学した目的について文理共通で見られたのは、学士課程の研究や実験をさらに発展させてより本格的な研究活動を行いたいという、研究そのものに対するポジティブな気持ちである。これは治部・星野（2021）の調査でも全体の54.3%が当てはまると回答している。Bは「修論という（自身がやりきった証としての）作品、成果物が欲しい」と思ったから進学したと述べた。

またEは研究について知的欲求を満たしてくれることや新たな知見を見出せることに面白さを感じていると述べた。同様にDも研究を通して理論を確立することや論争空間に入っていくことが面白いと述べている。院生らは研究に関して面白い・楽しいという言葉で語ることがほとんどで、学部時代に研究の一端を経験することで探求の喜びを発見し進学を決めたと見ることができる。また、東京大学大学院の教育・研究環境の豊かさを魅力として挙げるインタビューーも多かった。文系では図書館の蔵書数に加え、指導教員や先輩のサポートについての言及が見られ、Aは「所属先の教員は手を挙げれば助けてくれる」と述べたほか、Bは「研究室の先輩が欠席のサポートや履修のアドバイスをして気にかけてくれる」ので助かっていると述べた。理系では、所属研究室の設備についての言及が多く、Eは「お金に困っていない研究室なのでやりたいことを大体やらせてもらえる」と述べ、Gは自身の研究室の資金状況について「他の大学に分けてあげればいいのと思うことすらある」と述べている。

その他、文理に共通して聞かれた進学を後押しする理由としては、親が大学院に進学していたことで自身の進学に対しても寛容だったこと（B、G）、東大合格を喜んでいる親が、その延長として東大の大学院へ行くことにも賛成してくれたこと（A、F）が挙がり、大学院に進学する上でも親の理解は重要な要素と考えられる。これに加えて理系のインタビューーからは、大学院進学が「就職の上でプラス」（G）という意見があり、治部・星野（2021）と同様に理系の修士課程に関しては文系に比べ進学のハードルが低いと見られる。

一方で、既に複数の先行研究が指摘しているように、文系インタビューーからは大学院進学が経済面や就職面においてリスクとなりうるという声が共有聞かれた。Aは修士課程への進学を考える上で「修士課程には支援がないので不安」で、それが進学のネックになったと述べ、Bは「修士行くことにマイナスな気持ちはめっちゃくちゃあり、それは「院生で研究しながら就活できるのかという不安」や、文系院生というだけで書類落ちする企業や職種が存在するという話があるからだ」と説明している。治部・星野（2021）でも人文系の学生の進学理由として最も多かったのは研究への興味や研究課題への関心（69.4%）だったが、その背後には、研究への意欲が大学の教育・研究環境の豊かさに後押しされて想定されるリスクを上回る価値として認識された場合にのみ進学に至ることができるという仕組みがあるように思われる。

5. 修士課程でどのような不安・ストレスを感じているか

修士課程で院生が感じている不安やストレスには金銭的な不安・ストレス、研究に関する不安・ストレス、社会への不安・ストレスの3つが存在していた。表2はどの院生がどの不安・ストレスを感じているか、あるいは感じていないかについて分類したものである。本稿ではこれらについて、研究の不安・ストレス、金銭的な不安・ストレス、社会への不安・ストレスの順に分析する。

インタビューーが挙げた「研究の不安・ストレス」は、自身の研究の進捗や水準に関する不安・ストレスと研究室内の人間関係に関する不安・ストレスの2つに分かれており、後者は理系に特徴的なものと言える。まず、自身の研究に対する苦しさについて、Bはアウトプットが非常に面白いとしつつも「自分の観点や論の展開を明確に持つことが難しく、メンタルの天と地の落差が大きい

表2 修士課程で感じる不安・ストレス

	文理区分	金銭的不安・ストレス	研究の不安・ストレス	社会への不安・ストレス
A	文	◎	×	○
B	文	◎	○	◎
C	文			
D	文	○	△	
E	理	◎	○	◎
F	理	×	○	○
G	理	×	△	×

出所：筆者作成。言及したものに○、その中でも何度も繰り返し言及があったものや本人が特に悩んでいると語ったものには◎をつけた。あまり感じていないと明言したものは△、全く感じていないと述べたものには×、言及がなかった項目については空白とした。

ためきつい」と述べている。またBは、学部時代の授業に比べ大学院進学後の授業は課題も増えて忙しいことから、「学部の時は授業は手加減されて」いたと感じると述べた。学部と修士進学後で求められる水準の違いについてはFも感じている。Fは修士課程について「学部は勉強していればOKだったが、修士はディスカッションする力や自主性など広く要求される」ため難しいと述べた。またFは研究が「休みなく果てしないこと」にもストレスを感じており、「実験がうまくいかない時期が続いていろんな不安が出てきた」と述べている。次に研究室での人間関係について、Fは研究室では交流が少なく、分からないことがあったときに誰に聞いたら良いのか分からず精神的に気を使って馴染むまでに時間がかかったと述べている。またEは自身の研究室内に研究スタイルの違いに起因する複数のグループが存在しており、そのスタイルの違いが「グループ同士の仲の悪さを生んでいて気を遣う」と述べた。こうした人間関係のストレスは時間が経つ中で軽減される傾向にあるようだが、研究の難しさや要求水準の高さに関しては修士課程が始まって半年程経過した本インタビューの段階で強く感じている様子が見られた。

修士課程における「金銭的不安・ストレス」に関しては博士課程での経済的困窮と共通点が多く、大学院生らが修士課程の時点で経済的に苦しい状況にあることを示唆している。Eは生活について「必死に奨学金を探したり、バイトもしたりしながら生計を立てている」ため辛いと述べているほか、Bは「学部時のバイト量では今はきつけれど奨学金がない」ので研究を犠牲に生活していると話した。奨学金については他のインタビューーからも言及があり、次の「社会への不安・ストレス」を引き起こす要因の一つになっていると考えられる。

社会への不安・ストレスとは、研究に取り組みつつ就職活動や奨学金の申請を行なっているインタビューーの、自分の研究は社会から求められていないのではないかと感じることによる不安やストレスを指す。これは奨学金との関わりで言及されることが多かった。特に学部で貸与型奨学金を得ていたインタビューーは、修士課程で貸与額が増加することを避けるため、また研究に集中するために給付型の奨学金を探している者が多かったのだが、奨学金の申請・獲得状況について、Aは「給付型の奨学金は理工系に集中していて少ないのに、その中でもパイの奪い合いをすることに疲れてきたし拒絶されているような気持ちになる」と述べ、自分の研究の意義を信じたいと思うもの

の「自分に資金力もないし、社会からの資金提供も望みにくい」ので苦しくなることがあると語った。またBは、「民間奨学金は理工系中心で人文系の院生が出せるものはほとんどない」と述べ、複数の奨学金に応募したが全て落ちてしまったと語った。また国からの支援に関しては「(内容を)見ても人文系の研究じゃなくて工学の応用系のお金でしょと思う」と語った。東京大学のホームページ上で確認できる2020年度に募集があった民間奨学金のうち(注1)、修士課程1年生の日本国籍を持つ学生が応募できる給付あるいは給付と貸与からなる52件を、出願条件で指定・想定されている研究科ごとに分類すると工学系研究科を筆頭に理系の研究科及び理系の研究領域を出願条件として指定する奨学金が多く、文系の研究科を指定する奨学金は全体では2件だった。もちろん、研究科ごとに大学院生の数は異なっており、件数が多いことが直ちに理工系院生の奨学金獲得の容易さにつながるわけではない。しかし、懸命に奨学金を探しても研究科や研究領域といった募集条件を満たすものが見つからないという状況がAやBの抱く諦めや疲労を作り出していると見ることができる。東京大学では民間奨学金のほかに全学的な「国際卓越大学院教育プログラム(WINGS)」を実施するなど独自の支援プログラムを提供しているが、博士進学に強く惹かれつつも就職したいと語ったEは「東大からの奨学金は博士進学が前提なので使いづらい」と述べ、Bも学部3年次の募集でほとんど対象者が決まってしまうが、そのタイミングでは大学院進学を決断することはできなかったので応募しなかったと述べており、進学に躊躇いがある層にとっては修博一貫の奨学金はハードルが高く応募に踏み切ることができない側面があることがわかった。なかなか経済的支援を得ることができない状況の中、Eは自身の研究について「研究の社会的意味を聞かれて(それでも)絶対に研究したいと言える自信がない」と述べた。こうした発言からは、奨学金の領域限定的な募集や申請の過程でいかに「役に立つか」を意識することで、「研究は役に立たなければならない」と主張する仮想的な「社会」をインタビューが内在化させ、自身の研究の価値をそうした社会的な有用性の文脈で評価し苦しむ構造が読み取れる。同じく奨学金の採用されないこと、対象から外れることもインタビューにとっては自分の研究が社会から求められていないという感覚に強く直結しており、一連の金銭的不安・ストレスが社会から拒絶されているという感覚と結びついていることがわかる。

6. どう生きていきたいか、また研究者とはどのような生き方だと思うか

修士課程の最初の半年は自身の今後のキャリアや人生を検討する必要に迫られる時期でもある。次ページの表3は、希望とするキャリア・ライフプランについて右側にまとめ、また研究者というキャリアや人生がどのようなものであるかについて尋ねた際の回答を左側にまとめたものである。ここではそれぞれに見られる共通点について検討していきたい。

まず、家庭を持つことを念頭においてキャリア形成をしていきたいという考えが見られた。例えばBは「結婚や子供について本気で考えているわけではないが、子供生んだ場合の世帯年収とかは考える」と述べ、Dは「子供に自分と同じくらいの教育資源が与えられるくらいの収入は欲しい」と述べている。これに加えて自分自身が身体的・精神的に豊かに暮らしていくことができるくらいの時間が欲しいという声もあり、そうした生活が可能な職業に就きたいという傾向が見られた。

表3 将来のキャリアパスに関する希望と研究者のキャリアに関する認識

	人生とキャリアに関する希望	研究者としての人生・キャリアに関する認識
A	若いうちから給与が高い職について豊かな生活と高度な仕事をした い。ビジネスパーソンとしての経験を積んで自分の専門性をさらに強 化したい。現場で手触り感や主導権を持って変革を主導したいと思っ ている。	研究者が最も（民間研究職と比べても）研究テーマに縛りが無いと思 う。大学や研究機関の研究者は社会的にも重要な存在だと考えてい る。
B	いろんな業界や専門、複数のアクターの人と何かを作る仕事をした い。クリエイティブなことに関わると良い。性格上、のめり込めば ワークワークワークでやれると思うが、 <u>ライフの時間は欲しいし、生 存に必要な睡眠時間は削りたくない</u> 。	研究者は自分の研究を常にやり続けると同時に教える立場にならな ければならないことが大変だと思う。 <u>20代は博論の完成に捧げて、就職 が35歳とかでそこから研究者になれても常にアウトプットが必要で批 判される人たちだとも思う</u> 。
C	子供ができた場合はなおさら働きたいと思う。多少良い大学を出たの で多少良いところで働きたい。	親が大学教員なので、働き方にマイナスなイメージはない。研究者と いうのは実際は部屋に籠って研究ばかりやれるわけでもないし、接す る人の種類が偏っているように思う。
D	<u>仕事に人生を捧げたくないしホワイトなところがいい</u> と思ってはいた が、勉強したい意欲がある子に対してより良い学習環境を提供できる 職に就きたいとも思って今の仕事を選んだ。また生涯年収も気にして はいた。	研究者は土日働いていてブラックな労働環境だと思う。 また研究者は自分の知りたいことを深く貪欲に求めていく人間だと思 う。研究者として働く価値は（研究をした結果）世界で一番最初に （新しい知識を）知ることができることにあると思う。
E	<u>現場と密につながった場所で仕事をして、社会課題が間近で解決され るところを見たい</u> と思っている。労働時間よりは仕事がどれだけ社会 に還元できているかを見ていたい。 一方で、仕事がない時間も当然充実させたいので家庭をもちたいと考 えており、同時に子供に自分が施してもらったのと同じくらいの教育 資源が与えられるくらいの収入は欲しいとも思う。	研究者は授業準備も研究発表も研究もあって自分のことと学生の両立 が大変そう、信念があって芯が強いと続けられないと思う。 研究者の性質としては、他の人の意見を受け止めることに優れていて 話しやすいと感じる。またデジタル化が進んでいなくて保守的な印象 がある。 <u>研究者の研究活動は社会課題の解決よりはアカデミックな論 争の解決に重点を置いている</u> と思う。
F	目標に対して明確な意義や意味を感じながらでないし仕事はやれない と思っている。またチームで働くことができる仕事に就きたいと思 う。 社会に出て5年くらいは仕事に集中してスキルを身につけたいと考 えており、お金がもらえるなら過酷な労働でも一応は許容できる。また転 職ができるようなスキルを磨ける仕事であると良い。 今はやりたいことを制限されたくないでライフに関する希望はあま り考えないようにしている。何かあったときは実家にも戻れると良 い。	みんなの研究に関しては生き生きとやっているが、大学の研究者とな ると自分の研究以外の仕事死ぬほど降りかかってきていて大変そう。 研究者には自分が引っかかっていることとゴールとの間を埋めるため に何をしたら良いか逆算できる能力があると思う。
G	ものづくり、つまり新しいものや技術を世に送り出すことに魅力を感じ る。日常生活に関わっているような価値を生み出して実感する仕事 や自分の仕事でちょっとでも世の中が動くような仕事をしたい。 仕事である程度成果を出してやりがいを感じたいが、自分の時間が持 てないほど働くことは嫌だ。 またできれば親の近くで働きたいと思う。家庭は持ちたいので海外赴 任や転勤はあまりしたくない。	研究者はすごくタフで色々な仕事をたくさん、長時間やっている。また 知識量が半端ではなくて色々な意味で頭が非常によく超人だとも 感じる。趣味的にもアクティブで自分を高めようという欲がすごい。 また研究者には、自分の研究に対する粘り強さやパッション、膨大な 知識をインプットすること、人とディスカッションする力、批判的・ 論理的な能力が必要になると思う。 大学の研究者は申請など雑務が多すぎてブラックだと感じている。
	自分の仕事に価値があるかが働く上で第一優先。給与や待遇は仕事の 意義の次で良い。 将来的に家庭や子供を持つといったことは今は考慮に入れていない が、ある程度年取ったら親のことも考えて地元に行きやすいところ にいたいと思う。海外はそこで友達や家族を作れる気がないのであ まりいたくないと思っている。	共同研究、授業、指導、学会がある以上、研究者は死ぬほど忙しいな と思う。鬼のようなスケジュール、輪講と研究会とミーティングと学 会・打ち合わせがあり、また面倒見がいいのも輪をかけて忙しさが 増している。 研究者は知ることが多いしアプローチもたくさん出せて賢いと思 うことが多い。体力、知的好奇心の強さは必要だと思う。

出所：筆者作成。同一のインタビュー内で明らかに希望しているキャリアと研究者のキャリアに関する認識が対立していると判断できるものについては下線を引いた。

そして多くのインタビューイから聞かれたのは（A, D, E, F, G）、現場感のある仕事や世の中と密着した場所での仕事に就きたいという希望だった。例えばFは「自分の仕事でちょっとでも世の中が動くような仕事がいい」と語った。社会課題を解決することや、意義の感じられる仕事することへの希望も共通して聞かれ、Eは「全体の方針や目標づくりに介入できる仕事がしたい」と述べているほか、Dも「社会人になると仕事があるか・ないかという生き方になるので仕事を楽しめないという意味がないと思う」と述べた。職業選択において社会貢献、やりがい・生きがいを含む仕事

の楽しさを重視する傾向は、日本人の職業価値観を①経済性（お金を得るために働く）、②精神的報酬（自己成長・実現、仕事の面白さ・楽しさ、やりがい・生きがい）、③労働に対する倫理観、④安全性・安定性（生活の安定）、⑤人間関係、⑥職業や仕事から得られる他者評価、の6つに分類した高橋（2005）と照らし合わせれば、②精神的報酬を強く重視している価値観と言える。

こうした精神的充足や結婚・子育てといったライフイベントとキャリアとの兼ね合いをを意識する声は多く聞かれた一方、志望する職業を一つに定め就職活動をしているインタビューーはいなかった。むしろ多くの選択肢を目の前に広げ、比較考量して業界や企業を絞り込んでおり、博士課程進学及び研究者としてのキャリアは選択肢の一つとして他と並べられ、重視する条件に基づいて比べられた末に、（少なくともインタビュー段階では）選ばれなかった選択肢の一つと言うことができる。

では、こうした精神的報酬を重視するインタビューーにとって研究者というキャリアはどのように捉え、棄却された選択肢だったのか。次節ではインタビューーが挙げた進学しない理由を分析するが、ここでは研究者というキャリアをインタビューーがどう認識しているかということに焦点を当てて論じたい。Aは、「研究することは好き」だが「研究者として社会に関わっても間接的なインパクトしかもたらせない」し「社会経験がないのに社会について良い示唆を与えられるのか」と考えており、自身の求めるキャリアとは異なっていると思うと語っている。またDも「研究者の一連の研究活動が社会課題の解決よりはアカデミックな論争の解決に重点を置いている」ように思われると述べているほか、Gは博士課程進学から研究者になるというキャリアパスは「社会で何が困っているかを知らない」ところが難点だと述べている。こうした発言からは、インタビューーが研究者を社会から離れた存在と位置づけ、研究活動による知の生産が社会課題の解決や社会貢献に接続されていないと捉えていることがわかる。すなわち、アカデミアは社会との関係性において孤立しており、そのままでは「役に立たない」ものだと感じており、社会貢献や現場感、仕事の社会的な意義といった事柄を重視するインタビューーの希望と一致しない職業であるとみなされている。

7. なぜ博士・修士課程に進学しないのか、進学しないことをどう捉えているか

本節では、博士課程や修士課程に進学を選択しない理由と、進学しないことに対しどのような思いを持っているかということについて取り上げたい。表4では博士・修士課程に進学しない理由として当てはまるものを整理した。進学を希望しない理由は大きく分けて3つ存在しており、進学後の研究活動、進学後の生活や社会からの目、卒業後のキャリアに関するものが挙げられた。

7.1 進学しない理由

表4の項目のうち、「在学中の困難に関する理由」の「経済的困窮」と「卒業後のキャリアに関する理由」の「研究者の働き方」、「研究者の収入」、「ライフプラン」、「キャリアパス」については、先行研究や調査による指摘と同様に、大学院在籍中の生活費を得る当てがないこと（「経済的困窮」）、研究者が多忙で労働環境が悪いこと（「研究者の働き方」）、研究者としての給与が博士号取

表4 博士課程・修士課程に進学しない理由

	博士課程・修士課程に進学しない理由							
	進学後の研究に関する理由		在学中の困難に関する理由		卒業後のキャリアに関する理由			
	適性・能力	研究テーマへの熱意	経済的困窮	社会からの目	研究者の働き方	研究者の収入	ライフプラン	キャリアパス
A	○		◎			○		
B		○	◎	○		○	○	◎
C	◎	◎			○			○
D		○	○					◎
E	◎		◎	◎				
F	◎			○			○	◎
G			○	○		◎		◎

出所：筆者作成。進学しない理由として強く強調されたものに◎、理由の一つとして述べられたものには○をつけた。

得までのコストに見合わないこと（「研究者の収入」）、ロールモデルがおらず、結婚・出産といったライフプランとの兼ね合いも困難になりかねないこと（「ライフプラン」）、博士号取得後の民間企業・アカデミアにおけるキャリアパスが限られていること（「キャリアパス」）が挙げられた。

こうした懸念に対する対応の必要性は先行研究等による議論でも確認できたように、博士課程進学者減少の大きな要因として認識されており、また制度や施策による改善が試みられている途上にあることは本稿でも既に論じた。では、「進学後の研究に対する理由」の「適正・能力」、「研究テーマへの熱意」についてはどうだろうか。先行研究では、治部・星野（2021）の調査における博士課程への進学ではなく就職を選んだ理由に対する選択肢の「博士論文に値する研究テーマが見つからない」が比較的近いと考えられるが、回答率は全体で16.3%にとどまった。今回のインタビュー調査が修士課程の早期に行われたものであることも要因として考えられるが、能力以外に適性や熱意についても言及があることは注目すべき点である。そこで、もう一つ先行研究ではあまり言及が見られなかった「在学中の困難」の項の「社会からの目」の分析と合わせて、一見すると個人的な問題・判断に過ぎないように思えるこうした理由の社会構造的な側面を論じる。

研究テーマへの熱意について、Cは「分かりたいことを絞り込めなかった」ことが大きいと述べ、Dは博士課程に進学しない理由を「自分にとって十分な熱量と具体性がある課題がないと博士に行っても苦しむだけ」になるからと説明した。

また、適性・能力の点で、Aは自身の性格について「研究者としてコツコツと地道に何十年も研究できる性格ではない」と述べ、Bも「自分には興味関心がたくさんあるので（研究に）飽きるのが怖い」と述べた。またAやBは研究者であるからといって研究だけに集中することはできず、教育や学内業務といったその他の仕事をする必要があることにも言及した。Fは研究者の能力として研究資金を獲得するためのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力といったスキル、体力的なタフさを挙げて、そうしたものを自らが持っていないために「適性の面で博士でやっていけない自信がない」と述べている。Eは研究者としての資質について、指導教員や先輩らから評価され

たり「意欲さえあれば」良いと言われることもあるが、そうした意見は「生存者バイアスがかかっているんじゃないか」と思っており、「何をもって大丈夫だよって言われてるのか全く分からないし自分では全く大丈夫ではないと思っている」ため信じられないと述べた。

これに加えて、Bは当初は経済的な困難やキャリアパスを挙げつつも、それについて「そう言っておけば楽なんだけど」と述べた上で、結局は「茨の道に進む覚悟と研究能力への自信がない」からだともめている。

能力や適性に対する言及からは、インタビューーの中で、従来のとも言える「一つの研究テーマに没頭し長期的かつ地道に取り組む続ける」研究者像と、競争的資金獲得の必要性や学内業務の増加や高等教育の重要性の高まりといった比較的新しい「研究ばかりしてられない」研究者像が渾然一体となって認識されている様子が窺える。その結果、研究者に求められる資質や能力はかなり高度で多様かつ修士課程の時点で既に身につけているべき事柄と捉えられているようである。そして、そうした能力や適性についての自己評価が低いという点も認められ、他者評価を受け入れることが難しい状態であることも確認された。

その背後には既に先行研究で指摘されてきた経済的困窮やキャリアパス、研究者の処遇に関する強い意識が関係しているものと思われるが、インタビューーにはそうした制度・施策の問題としてではなく自身の能力・適性、熱意の問題として「茨の道」への挫折を形容する傾向がある。しかし進学に対して高い熱意やテーマの将来性の必要を意識し、そしてそれらについての自己評価を低く見積もらざるを得ない一因には、博士進学に伴う経済的・将来的困難というリスクを抱えてもなお進学できるか否か、そして降りかかるリスクを自己責任として許容できるか否かの判断が求められている側面があると言え、個人的問題と片付けることは望ましくない。

そして、博士課程に対する社会的な評価の低さがこうしたリスク認識と判断に影響を与えている可能性がある。Gは博士進学後の自身の状況について、周囲が「社会人何年目とかやってる横で運良く奨学金で暮らしていけるくらい」で恵まれておらず、「わざわざリスクをとって今博士に行かなくても」いいと述べた。またEは「それ研究してどうすんの?という声が博士に行くとか強くなる気がするし、就職という面でより自分を追い込むと思っている」と述べており、Fも社会が「サイエンスに関する仕事や学歴」を大事にしない以上、博士課程に行く気はない、「みんな自分が可愛い」ので仕方がないと語った。博士課程の院生や研究に対して社会から向けられる冷たい眼差しや劣等感を見聞きし想像することによって博士課程進学をリスクと捉える傾向が強まり、自身の研究と研究能力・適性への自信の喪失につながっていると見ることができる。

7.2 進学しないという選択に対する思い

これまで見てきたように、インタビューーの博士課程進学・研究者というキャリア、また自身の研究能力・適性、熱意といった事柄に対する見通しはかなり厳しい。一方で、大学院に進学したインタビューーからは大学院進学が自己成長や能力開発、キャリアパスの多様化の点でも有用であったという声が聞かれ、Fは異分野の仕事に着くことになっても「基礎的な研究力はあるからそれを生かしたい」と述べ、Eも「自分の責任がある中で目標を立てて進める体験ができて考える力が鍛

えられた」と修士課程での経験を評価している。また、研究者として今後学術に関わることがなくともなんらかの形で学術に貢献していきたい、あるいは学術と社会をつなぐ存在になりたいという思いも見られた。現在の就職先を選んだ理由として学術への貢献を挙げたCのほか、在野でも研究がしたいと述べたAに加え、Bは「修士卒のサラリーマンになる上でアカデミアとの繋がりを持つていたいと思っている」と述べ、Eも「自分が修士に行ったことがこの後のキャリアで社会と学問の仲介として役立てば良いなという気持ちはある」と述べた。

しかし、こうした前向きな気持ちを持つ一方で進学を断念したことについて後ろめたさを感じるという声もあった。Cは当初研究者を目指していた自分が修士課程に進学しなかったことについて「何というか、怠慢なんだよ。だから結局興味がある分野も狭まらないし自分が知りたいテーマも狭まらないのかなって。だから、マジ東大まで行ってクソだなんて思ってる」と語っている。キャリアパスや経済的困窮などの政策的な課題を挙げつつも「そういっておけば楽」と博士課程に進学しない理由を自身の問題に帰したBのように、困難な道を選ぶことができなかった自分の学問的な姿勢に対して後ろめたい思いを抱え、学問や研究と今後のキャリアや人生を通して何らかの形でつながっていたい思いながらも、研究者として生きていくことはできないと判断している院生らの中には、社会に対する怒りというよりも自身の適性・能力が研究者に向いていないのだからしょうがないと納得しようとする語りや研究者というキャリアを選ばなかったことへの罪悪感が見られた。

8. 結語

本研究では、博士課程への進学を目指さない大学院生らを対象に、目指さないという決断に至る過程と在学時のストレス・不安、自身のキャリア観と研究者観についてアカデミアと社会の関係性という観点から分析し、博士課程への進学を選択しないメカニズムを仮説的に提示することを目的としたインタビュー調査を行った。

まず、修士課程進学を決断する際に共通する理由として研究への興味関心が挙げられ、経済的不安がある中でも親の理解や大学院の充実した研究環境がそれを後押しすることが明らかになった。また理系に対して文系では就職の際に院卒という学歴が不利に働くことが認識されており、文系大学院への進学にあたってはそうしたリスクを上回るだけの研究への興味があるかどうか重要な点として捉えられていることも示唆された。

そして、博士課程進学を目指さないメカニズムは以下のような構造をもっているという仮説を得た。初めに、修士課程に進学後、研究の進捗や研究室の人間関係、経済的な困窮といった悩みだけではなく、自身の研究が社会から求められていないのではないかという不安・ストレスが強く認識され、それが、奨学金や各種の制度・施策における領域限定性、社会的有用性の強調と関連して社会的なストレス・不安として存在している。次に、進路の岐路に立ち、将来について検討する際に修士課程の院生は社会的意義や仕事のやりがいといった精神的報酬を重視し、博士課程進学及び研究者というキャリアをまさに一つの選択肢として他の選択肢と並べ、比較する。その過程で、社会への不安・ストレスとして感じていたアカデミアと社会との断絶に対する認識を深め、キャリア選択から博士課程進学を除外するようになる。また院生はこうした職業価値観によるキャリア選択に

加えて、研究者としての能力・適性や研究テーマへの熱意といった点からも博士課程への進学を断念する傾向にあるが、これは従来指摘されてきたような経済的・就職的困難に加え、大学院生や学術に対する社会からの低い評価への懸念といった社会的要因を含んだ葛藤の末の自己責任への着地であり、純粋な個人的問題で制度や施策の範疇外だとは断定できない側面がある。

こうしたメカニズムの中で博士課程への進学を目指さなくなるものの、修士課程での経験を好意的に評価されており、卒業後も学術と関わっていきたいと考えている。しかし一方で、博士課程進学をしないという自身の選択について後ろめたさを感じ、選択の責を覚悟や能力の不足に帰そうとする態度が見られた。

今回のインタビュー調査では調査設計の段階でいくつかの限界が認められており、以上の知見から直ちに一般性を認めることはできない。キャリア選択において、どの程度アカデミックキャリアを志向するかには個人差があることは疑いようがなく、また修士課程への評価や学術との関係性についての希望、博士課程に進学しないことの後ろめたさ、そして能力・適性評価における社会的側面の寄与度についてもについても対象を明確化しさらに大規模な調査を行う等によって検証が必要である。しかし、各種支援策・制度等における社会的有用性の強調や院生によるそうした規範の内面化が、研究はそのままでは「役に立たない」という意識やアカデミアが社会から離れているという価値観、ひいては院生の疲弊に結びついているという点は重要な論点であると考えられる。こうした認識は領域限定的な支援やポストの増設で緩和されることはないと思われ、非選択的かつ早期的な支援の拡充や領域を限定しないポスト、特にテニユアの増加といった、学術全体を長期的かつ安定的に発展させていく取り組みが重要性を増すだろう。加えて、博士課程進学者増という観点では、今回インタビューしたようなアカデミックキャリアへの確固たる志望を早期に持たなかった層に対し見切りをつけるよりは、彼らのキャリア選択の俎上に博士課程進学が有力な選択肢として残るように、研究者と社会との関わりの実態や研究者として求められる能力、それを身につける過程について知る機会をさらに拡充し、大学が優秀な研究者の確保に向けて組織として戦略的にアプローチすることが有効と考えられる。

また、院生の研究能力・適性、熱意に対する評価と自信をいかに適当なものにしていくかという点はアカデミアの今後の取り組みとして重要である。修士や学部での研究経験について博士課程未満としてなおざりに済ませず、その意義や培われる能力について更なる議論と取り組みを通じて明確化していく必要がある。それが修士課程と博士課程双方でのより高度で信頼性のある大学院教育につながり、社会でのアカデミアの立ち位置を変化させるきっかけになると考えられることから、全学、学部・研究科、専攻、研究室といった様々なレベルでのより意識的なカリキュラムについての議論と編成が求められている。

謝辞

インタビューの皆さんが研究や仕事に忙しい中、貴重な時間を割いて快くインタビューに協力してくださった結果、本稿を執筆することができた。研究への多大な貢献にこの場を借りて厚く感謝申し上げたい。

【参考文献】

- 岡本茜 2018「人文科学系大学院修士課程の教育とその意義 ―非アカデミック職への就職者に着目して―」東京大学大学院教育学研究科修士論文（未公開）.
- 岡本拓也 2015「博士人材のキャリアパスの把握・可視化に向けて ―博士人材データベース・博士人材追跡調査―」国立大学法人研究担当理事・副学長協議会（第8回）配付資料10. 〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shinkou/025/gijiroku/icsFiles/fieldfile/2015/02/17/1355058_13.pdf〉[最終閲覧日：2022年2月11日]
- 科学技術・学術政策研究所 2021「科学技術指標2021」『NISTEP RESEARCH MATERIAL』311 文部科学省 科学技術・学術政策研究所. 〈<https://doi.org/10.15108/rm311>〉
- 加藤真紀 角田英之 2009『日本の理工系修士学生の進路決定に関する意識調査〔調査資料 165〕』文部科学省 科学技術政策研究所. 〈<http://hdl.handle.net/11035/895>〉
- 治部眞理 2021「博士離れの要因についての一考察」『STI Horizon』7:2 47-52. 〈<https://doi.org/10.15108/stih.00260>〉
- 治部眞理 星野利彦 2021「修士課程（6年制学科を含む）在籍者を起点とした追跡調査」『NISTEP RESEARCH MATERIAL』310 文部科学省 科学技術・学術政策研究所. 〈<https://doi.org/10.15108/rm310>〉
- 高橋美保 2005「『働くこと』の意識についての研究の流れと今後の展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』45 149-157.
- 寺尾智隆 梅崎修 田澤実 2015「大学院卒の就職プレミアム ―初職獲得における大学院学歴の効果―」『日本労務学会誌』16:1 21-38.
- 日本経済新聞 2018「日本の研究力、どう再興——東京工業大学栄誉教授大隅良典氏、『やりたいこと』こそ大事（複眼）」, 2018年8月28日 朝刊 p. 6.
- 濱中淳子 2021「企業の文系大学院修了者の採用行動」吉田文編『文系大学院をめぐるトリレンマ 大学院・修了者・労働市場をめぐる国際比較』玉川大学出版部 104-120.
- 文部科学省 2021『令和2年度 文部科学白書』日経印刷.
- 文部科学省 科学技術・学術審議会人材委員会・中央教育審議会大学分科会大学院部会合同部会 2018a「我が国の研究力強化に向けた研究人材の育成・確保に関する論点整理」〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/toushin/1410398.htm〉[最終閲覧日：2021年11月26日]
- 文部科学省 中央教育審議会大学分科会大学院部会 2018b「研究人材の育成・確保を巡る 現状と課題」第79回科学技術・学術審議会人材委員会資料 参考資料11. 〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/002/shiryo/_icsFiles/fieldfile/2018/04/03/1402888_4.pdf〉[最終閲覧日：2022年2月11日]
- 吉田文 2021「文系大学院修士課程修了者の採用の論理 その幻想と現実」吉田文編『文系大学院をめぐるトリレンマ 大学院・修了者・労働市場をめぐる国際比較』玉川大学出版部 121-158.